

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

本号は、福島県白河市に開所した「知足庵」、石巻の川開きの話、さいたまサポートステーション「もみの木」の8月11日の「七夕の祈り」、被災地釜石の子どもたちの運動不足解消と礼儀、マナーを身につけるために行われた「スナッグゴルフ」教室、そして宮古ベースボランティアとして釧路から活動に参加された神父様の体験記と、大変バラエティに富んだ内容をご紹介します。どうぞご覧ください。

癒しの館“知足庵”

仙台教区サポートセンター 小野 武

去る7月28日、“知足庵（ちそくあん）”開所式が福島県東白川郡鮫川村で行われました。

“知足庵”は、東北新幹線新白河駅から車で約1時間いわき方面に入った、山間の鮫川村にあります。築100年の古民家を譲っていただいたもので、とても重厚さを感じさせる建物です。

この建物は、若者自立支援を行っている「NPO法人明日飛（あすび）子ども自立の里」代表清水国明さんと「傾聴ボランティア白河みずく」代表金澤弘子さんが協力して、傷ついた人や志ある人が集える館として開所したものです。



式は、「東日本大震災被害者追悼式及び知足庵開所式」として挙行されました。主催者を代表して、副代表の金澤弘子さんが「宗派を超えて、追悼式と開所式を執り行うこととした。福島県での震災関連死は、直接亡くなられた人を超えた。原発事故は取り返しがつかない、特に使用済核燃料は処理方法が確立していない。人々は右上がりの生活を求めすぎている。この“知足庵”では、玄米と野菜の食事を出している。“足るを知る”生活が大切である。この地から何かを変えていかなければならない。」との主旨のお話をされました。

神道の宮司、仏教の僧侶に続いて、カトリック仙台教区を代表して平賀徹夫司教が追悼の祈りと開所のお祝いを述べられました。

当日は、晴天でとても暑い日でしたが、林間から吹いてくる風が涼しく、東京から来られた方は、とても涼しくて快適だと話されていました。

鮫川村の人口は、約3,700人で森の合間での稲作と畑作が中心の村です。ヤマユリが村の花になっていて、道端に点在して咲いていました。

“知足庵”は、癒し祈り 黙想 瞑想の場を目指しています。現在は、第一期工事が終了し、次は茶室など



も造る予定になっているようです。近くには、牧場もあります。とても難しい課題が山積して、癒されずに苦しんでいる多くの方が“知足庵”を利用され、心が癒されることを願っています。

《知足庵（祈りの庵）》

「知足庵」は、原発被災による不条理極まりない苦しみを真正面から引き受け、それを捧げものとするにより、この地が全人類の一人一人の回心を呼び醒ますことを願い信じて設立する『癒し 祈り 黙想 瞑想』の家です。東洋のテゼをめざしています。

(あすび知足庵設立のご案内より引用)

NPO 法人 明日飛子ども自立の里 知足庵

住所：福島県鮫川村赤坂東野葉貫13の2



※東北新幹線 新白河駅から
車で約70分
※常磐自動車道 勿来インターから
車で約30分

石巻川開き祭りに参加して

カリタス石巻ベース 細谷 朋子

石巻川開き祭りは毎年7月31日、8月1日に行われます。石巻ベースは7月31日灯籠流し、8月1日大漁踊りにスタッフ、ボランティアが参加しました。

灯籠流しは、仮設住宅やベースを利用する方、ボランティアの皆さんにそれぞれのメッセージを灯籠に書いていただき準備してきました。「灯籠に何かメッセージを書いてみませんか？」と促すと、皆さんペンを持ちながら「うーん。」と考えこみ、書き始めます。心の奥にあるものを書くには時間がかかります。地元の復興を願うもの、平和、希望、亡くなった家族への思い等、たくさんのメッセージをお預かりしました。



当日、スタッフが会場で組み立て、係りの方が丁寧に灯籠を流してくださいました。川岸で読経が流れるなか、若いご夫婦が子どもの名前を書いた灯籠を係りに渡しているところを見かけました。静かに手をあわせている姿を見て、私も見ず知らずの家族のために心をあわせて祈りました。昨年も感じたことですが、灯籠が流れていくときは一つかもしれませんが、しばらくすると集まって一緒に流れる様子を見て、けっして一人ではないみんながつながって天の国に向っていること感じました。一人寂しく旅立ったのではなく、旅の道連れがいることを確信し安堵しました。亡くなった方の魂がどのように旅立つのか、目に見える形が灯籠流しのように思いました。



8月1日は大漁踊りに町内会の一員として参加しました。町内会のご婦人たちと一緒にオープンスペースで練習を重ねながら本番を迎えました。周りの皆さんがスタッフやボランティアさんの浴衣まで心配して前日までにいろいろな浴衣が集まり、浴衣あわせも楽しいひと時でした。スタッフはもとよりボランティアさんの浴衣まで考えてくださった町内会の皆さんの温かい心遣いがとても嬉しかったです。中には津波で亡くなった身内の大事な浴衣を貸してくださった方もいて、心が引き締まりました。外国人支援センターのスタッフも少し照れながら浴衣とハッピーに着替え「似合うね!」と喜ばれていました。小雨が降ったり、西日が強かったり天候は厳しいものがありましたが、最後まで楽しく踊ることができました。

石巻ベース単独で参加するのではなく、町内会の方々と一緒に練習し、浴衣を着つけてもらい、いろいろなことを言い合いながら一つになることは本当に意味があることだと思います。石巻ベースが普段から町内会や近隣の方と関わりを大切にしていることが、「大漁踊り」に表れているようです。お互いが支えあっている姿は「兄弟のように共に住むのは……」のみ言葉のようでした。上手に踊ることを目指すのではなく、石巻市の皆さんの仲間として大漁踊りに参加できたことは、ベーススタッフ、ボランティアさんの喜びでもあります。踊り疲れたその夜は、ベースの屋上から泡のどる飲物を飲みながら花火を見る事ができ、至福のときでもありました。



ことも含めて引き継がれていましたが、この「七夕の祈り」について、朝尾ベース長は全然聞いていなかったのです。

そのため、朝尾ベース長は、逆に仮設住宅の人々から「今年の七夕の祈りはいつ?」と尋ねられたり、「いつものように、もみの木さんのためにも竹の七夕飾りを作っておいたから、帰るときに持って帰ってね」と言われ、「周囲の人に助けられて、この七夕の祈りを行うことが出来ました」、と挨拶をされました。

8月11日、午後2時からこの祈りが始まりました。祈りの初めは、高田敏子さんの詩、塩田泉神父様の作曲の「水のこころ」を参加者一同が歌うことで始まりました。司式は、さいたま教区高崎教会主任の坂上彰神父様。

いつくしみ深い神に、亡くなられた方を主のみ手に委ね、苦しみの淵にいる残された私たちの叫びを聞き入れ、重荷を取り除いてください、と祈り、マタイ5:1~10の「真福八端」が、本田哲郎訳で朗読されました。しばらくの沈黙の後、たくさんのろうそくに灯が点じられ、ちょうど2時45分に1分間の黙禱をささげ、今年、仮設住宅で亡くなられた人の名前が読み上げられる中、一人ずつろうそく台にろうそくをささげ、復興ソングの一つ「花は咲く」をみんなで歌いました。

参加者は、仮設住宅から来られた方、いわき教会の信徒、ボランティアでいつも奉仕して下さっている方々、サポートセンターの小松史朗神父などが出席しました。

お茶会の時に「もみの木ブレンド」という銘のコーヒーを創作し、自らコーヒーを入れてくださった青木さんは、7年前に娘さんが急逝してはじめて、死が終わりではないということがわかった、と分かち合ってくださいました。終始、祈りの雰囲気のうちであり、最後は聖歌などをみんなで歌い、会が閉じられました。



主よ、
七夕で祈りに託して書かれたすべてを、
あなたに委ねます!

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

いわきサポートステーション「もみの木」は、2011年12月23日の開所式以来、福島原発被害を受けふるさとを追われ、いわき市内の仮設住宅に住む多くの人々との交流、傾聴活動によって地域の仮設住宅の方々から信頼を受けています。

2012年以降、「もみの木」は、毎年、3月11日と七夕に合わせて、地震、津波、またその関連死された方々の永遠のご安息のため、さらに、いまでも苦しんでおられる被災者の方々のために「祈りの会」を主催しています。

今年の「七夕の祈り」には、ちょっとしたエピソードがありました。今年の3月末で、ベース長ホアン神父様と

常駐スタッフの高橋ゆりさんがお辞めになり、新しいベース長・朝尾光二さんが就任されました。各仮設住宅での「お茶っこ」は、人的な



子どものスナッグゴルフ教室

仙台教区滞サポートセンター 長島 明子

8月8日(金)10時から12時の間で、幼稚園生から小学生を対象とした「子どものスナッグゴルフ教室」を開校しました。当日は心配されていた雨もどうにか降られずすみ、10人の子どもたちが参加してくれました。

会場となる釜石市球技場は、日本のラグビーの聖地といわれる松倉グラウンドを、一昨年、人工芝のフィールドに改装し、環境が整備されとても美しく広いグラウンドとなっています。



宮古の仮設住宅を訪問して

カトリック釧路地区協力司祭

中村道生神父（フランシスコ会）

ところで、なぜ被災地でスナッグゴルフを開催するに至ったかをお話すると、きっかけは、釜石市の子ども支援事業に携わる支援団体が集まる情報交換会に参加した時のことです。その時の会議で、被災地の子どもたちは「肥満傾向にある」という問題が挙げられておりました。被災地ではかつて遊んでいた遊び場は被災していたり、仮設住宅が建てられていたり使えず、またスクールバスでの登下校により、放課後、学校で遊べる子どもは少ないとの話し。仮設に帰って遊ぶにも、うるさいと注意され思うように遊べず、静かにゲーム機で遊んでいるという状況です。今では、肥満だけに限らず、暴力的な態度や暴言を言い出すような現象までもが現れてきました。遊びは、子どもたちにとって、日々のストレスを発散する場所。遊びが制限され、ストレスが発散できないままの子どもたちが増え、他の被災地では、学級崩壊に繋がったところも事実存在しています。



このような状況下で、子どもたちのストレスを発散させ、運動機会を増やすには何があるかと考え思いついたのが、スナッグゴルフでした。震災前までゴルフのティーチングプロをしていた私が今できることは、これしかなかったのが正直なところです。

話は戻って、当日のスナッグゴルフ教室。今回で4回目の開催。始めた当初は体育館で開校していましたが、今回の開催場所は、初の野外フィールドです。

この広い人工芝のフィールドに入るや否やの子どもたちの第一声は、「うわー！広い！」「走ってもいい!？」でした。それを言い残して、歓喜の雄叫びを上げながら縦横無尽に駆け回る姿は、なんとも無邪気で微笑ましく、まるで籠の鳥が開放されたかのようでした。屋内での開催と比べ、子どもたちの目の輝きはまぶしく、ゲーム機で遊んでいる時よりもはるかに生き生きとし、全身からエネルギーが溢れ出ているようでした。

スナッグゴルフ教室のスケジュールは決めていません。子どもたちが好きなように遊べるように、的当てゲームの場所、ひたすらボールを打ちまくる場所、慣れている子どもたちには、コースをつくりラウンドできるようレイアウトしました。また、それぞれの箇所にはボランティアさんを配置し、子どもたちの見守りをお願いしました。このボランティアには、釜石市在住のゴルファーの方々3人と、2年半前に神奈川県でレッスンしていた時の生徒さんがかけつけてくださり、本当に助かりました。このつながりに感謝の気持ちで一杯です。終了時間とともに、雨が降ってきて「おしまい」となり、子どもたちからの感想を聞くと「また、絶対やりたいから来てね」とか、「運動、得意じゃなかったけど、これなら上手にできた!」と自信をつけた子どもの話も聞けて、逆に自分が癒され、元気付けられるのを感じました。また、一緒に遊ぼうね!と約束し会場を後にしてまいりました。

<教室の様子>



最初は上手くボールに当たらなかった子どもも、基本のグリップ、アドレス（構え）を教えると、自然とボールに当たってきます。とても上達が早いのに驚かされます。

時間一杯まで、ひたすら休まず、もくもくと集中し、ずっと打っている子どもがほとんどでした。

7月23日から8月2日まで、札幌教区サポートセンターの呼びかけに応じる形で、何かお手伝いできればと宮古ボランティアに参加しました。福島原発問題については今もそれなりに関心をもってかかわってきましたが、それ以外の被災地とそこで暮らしている方々への関心は正直ほとんどなくなっていました。原発問題に目を向けることによって安易に背を向けてきたところがあります。震災から3年半近くになり、私の中ではだんだん遠い存在になっていた震災の被災地を訪問し、今も仮設住宅の生活を強いられている方々の現状に身近に触れ、多くのことを考えさせられる時となりました。

7月24日から、毎日仮設住宅を訪問しました。宮古にはまだ仮設住宅が60か所もあり、3,000人ほどの方が入居されたままだといわれています。各仮設には集会所（談話室）があって、私たちはここでカフェをオープンし、お茶やコーヒーの接待をし、バケツにお湯を入れ、足湯のサービスもします。私は最後の晩餐の時、イエスが弟子たちの足を洗われたことを思い起こしました。

この仮設のおばあさんたち4、5人はお茶を飲みながら高校野球「花巻東と盛岡大付」との決勝戦に盛り上がっていました。ところが、田老から避難して来たというおじいさんはみんなから少し離れて外を向いて座っておられました。田老は「スーパー堤防」ができていて安全だといわれていたのですが、「3.11の津波」はこれを乗り越え、多くの人を飲み込んでしまいました。



私は、仮設訪問最初の日でもあり、おばあちゃんたちの輪にも入れず、手持ち無沙汰にしていたところ、田老から来られたおじいさんに突然、「ちょっと肩揉んでくんねえーか」と言われ、ドギマギしながら10分くらい揉んであげました。その後、別のボランティアのご婦人が「ぜひ足湯を」と勧めました。後で、足湯をしてあげた方から聞いたのですが、そのおじいさんは少しずつ身の上話を始められ、自分の嫁と孫が田老の津波で流されたことを涙ながらに話されたとのことでした。



私は宮古教会で毎朝ミサを捧げ、2、3人の方が参加されていました。そのうちの一人で、教会の目の前の家に住んでおられるおばあさんが最後の前の晩訪ねて来られたので、是非お茶を飲んでいって下さいと言って、いろいろとお話を伺うことになりました。この方もやはり、親戚や友人たちが津波で命を失い、ご本人も、昭和8年1歳の時、「昭和三陸津波」に遭われ、家を失い、おじいさんに負われて命からがら逃げたとのことでした。

震災後3年が経過した宮古市は、漁業をはじめ産業面においても徐々に回復しており、お祭りやイベントも行われるようになり、復興してきているのは確かだと思いますが、一人ひとりの心の深みには負いきれないほどの重荷があるのだと感じさせられました。